



Data

監督・製作・共同脚本：ピーター・ファレリー

出演：ヴィゴ・モーテンセン／マハーシャラ・アリ／リンダ・カーデリーニ／ディミテル・D・マリノフ／マイクハットン／P・J・バーン

👁️👁️ みどころ

“白すぎる”のがダメなら、“黒すぎる”のもダメ！そんな反省の上（？）に、第91回アカデミー賞は、白人と黒人のおじさん2人のロードムービーが作品賞をゲット！

時は、公民権法制定前の1962年。舞台は黒人差別が根強く残る南部の各都市。そこに公演旅行に行くのが黒人の天才ピアニストのドクターで、白人のトニーがその運転手だ。そのため、車の中や演奏会場では黒人が“ご主人様”だが、それ以外では・・・？

スクリーン上に観る、差別の実態にビックリ！思わずケンカ沙汰になると即逮捕だから、酷い。しかし、数ヶ月に及ぶそんな体験を続けていると・・・？

少し出来すぎの感もあるが、トランプ大統領の大号令下、何かとギスギスしている昨今、2人のおじさんが織りなすこんな心温まる映画でホッとできれば、幸せかも・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□ 「グリーンブック」って何？この2人のおじさんは誰？■□

今ドキの若者は誰でも「フェイスブック」は知っているが、「グリーンブック」は知らないのでは？そういう私も、恥ずかしながらそれは知らなかった。「グリーンブック」ってナニ？また、本作の二人の主人公であるトニー・“リップ”・バレロンガ（ヴィゴ・モーテンセン）とドクター・ドナルド・シャーリー（マハーシャラ・アリ）をあなたは知っている？恥ずかしながら、私はそれも全く知らなかった。

私はスパイク・リー監督の『マルコム X』（92年）をたまたま入った映画館で観て、大

ショックを受けたが、その時も「マルコム X」のことは全く知らないまま映画を鑑賞した。しかし、その鑑賞によって「マルコム X」のことは知ったし、その後も再三映画評論に引用しているから、今ではすっかり私の頭の中に入っている。このように、映画を観る時に、その主人公を知らない事やタイトルの意味を知らないことは決して恥ではなく、その映画を鑑賞したことによって勉強できたことを感謝すれればいいだけだ。

しかして、「グリーンブック」とは黒人旅行者を対象としたガイドブックだ。パンフレットによれば、次のとおりだ。

グリーンブックとは：

1936年から1966年までニューヨーク出身のアフリカ系アメリカ人、ヴィクター・H・グリーンにより毎年作成・出版されていた、黒人旅行者を対象としたガイドブック。黒人が利用できる宿や店、黒人の日没後の外出を禁止する、いわゆる「サンダウン・タウン」などの情報がまとめられてあり、彼らが差別、暴力や逮捕を避け、車で移動するための欠かせないツールとなっていた。ジム・クロウ法(主に黒人の、一般公共施設の利用を制限した法律の総称)の適用が郡や州によって異なるアメリカ南部で特に重宝された。

他方、ドクター・ドナルド・シャーリーは1960年代の天才黒人ピアニストで、実在の人物。また、トニー・“リップ”・バレロンガはイタリア系の白人で、ドクター・ドナルド・シャーリーの運転手として人種差別が色濃い米国南部を旅した実在の人物だ。したがって本作は、この2人のおじさんを主人公にしたロードムービーで、よくある“実話に基づく物語”だが、なぜ今そんな実話が映画に……？

■第91回は“白すぎるオスカー”から脱却？■

第87回と第88回アカデミー賞では、主演男女優賞と助演男女優賞にノミネートされた俳優20人が白人ばかりで黒人が1人もいなかったことが批判された。それに対して第89回アカデミー賞は「昨年はホワイト、今年ブラック」となり、『ムーンライト』(16年)が作品賞を受賞した。そして、第90回は『レディ・バード』(17年)が作品賞を。

それに対して、第91回アカデミー賞の事前の話題は、第1に『ROMA ローマ』(18年)が動画配信作としてアカデミー賞に初登場したこと。第2に“黒人映画”が多いことだった。そのため、事前予想では、「変わるアカデミー賞」「作家色強い映画が受賞の傾向、興収と隔たり」「動画配信作品 受賞なるか」「グリーンブック、ROMA ローマ 有力」等と報道されていた。結果は、前評判の高かった『ボヘミアン・ラブソディ』や『ROMA ローマ』『女王陛下のお気に入り』等の有力作を排して本作が作品賞を受賞。(『ボヘミアン・ラブソディ』はラミ・マレックが主演男優賞を、『ROMA ローマ』は外国語映画賞を受賞)

黒人映画としてもう一つ注目されたのは、スパイク・リー監督の『ブラック・クランズマン』(18年)だが、なぜ、『ブラック・クランズマン』ではなく、『グリーンブック』が作品賞をゲット?それについては、両者をじっくり対比して考えてみたいが、2月28日付朝日新聞に「対立より連帯 憎しみより愛を」と書かれているのが参考になる。

■同じ運転手役でもアレとコレとは大違い! ■

映画俳優にとっては、体重を10kg単位で増減するのは仕事=役作りの一環。『マシニスト』(04年)では、クリスチャン・ペイルが30kgも減量したガリガリの姿で登場したことに驚かされた(『シネマ7』382頁)が、本作では、ヴィゴ・モーテンセンが体重を20kgも増量して登場している。そのうえ、本作でヴィゴ・モーテンセンが演じた武骨なイタリア系白人男トニー・“リップ”・バレロンガは、運転中もバーガーやフライドチキンを食べまくっているから、リップは太る一方・・・?ちなみにパンフレットでヴィゴ・モーテンセンは「食べるシーンがたっぷりあるのがきつかったよ。」と述べているほどだ。

他方、ヴィゴ・モーテンセンは、『イースタン・プロミス』(07年)でアカデミー賞主演男優賞にノミネートされた演技派だが、同作でも彼はロシアン・マフィア「法の泥棒」の運転手ニコライ役を演じていた(『シネマ19』199頁)。しかし、ニコライは本作の運転手役とは大違いで、黒い服、黒いサングラス、ぶっきらぼうなしゃべり方はマフィアそのものだった。また、同作では彼のスリムに研ぎ澄まされた肉体美とアクションが見もので、とりわけ素っ裸での熱演がアカデミー賞主演男優賞に寄与していたはずだ。それに比べると、本作にみるヴィゴ・モーテンセンの肥りっぷり、運転手ぶり、おじさんぶりは・・・? 同じ運転手役でも、アレとコレとは大違いだ。

もっとも、本作でトニーが運転手になったのは、ニューヨークの一流ナイトクラブであるコパカバーナが改装のため2ヶ月間閉店されるためだ。そのため、トニーの本職だったコパカバーナでの用心棒を一時休業し、家族のために新たな仕事(バイト)を探さなければならなくなったわけだ。トニーはイタリア系の移民で、黒人差別主義者。そして、がさつで無学な男だが、腕っぷしは強くハツタリも上手だから、ナイトクラブの用心棒はいかにもピッタリ。しかし、そんな男に運転手なんて務まるの?

■この黒人天才ピアニストもかなりの変人? ■

そんなトニーの下に「運転手募集中」の情報がいったが、その募集主はドクター・ドナルド・シャーリー(マハーシャラ・アリ)。そう聞けば、誰でもこれは医者だと思わずだ。そう思ったトニーが面接のため住所所地まで行くと、何とそこはカーネギー・ホールだった。つまり、この男は医師ではなく黒人のミュージシャンで、カーネギー・ホールの上の階の御殿のような部屋に住んでいたから、トニーはビックリ!この時点ではトニーは、この男が、巨匠ストラヴィンスキーから“神の域の技巧”と絶賛され、ケネディ大統領のために

ホワイトハウスでも演奏するほどの天才だということは知らず、えらく気どった嫌なヤツだと思ったらしい。そのため、雇用条件が車の運転のみならずドクターの靴を拭く等の身の周りの世話を含むと聞かされると、「俺は召使いじゃない！」と自分からハッキリ拒否。もともと、黒人差別主義者のトニーだから、「黒人との仕事に抵抗が？」と聞かれた時には、「ないね」と即答したものの、やはり黒人の車の運転手をする事自体に気が進まない上、召使いの仕事なんかアホらしくてやってられるか！と思ったのは当然だ。ところが、その後ドクターから直接電話があり、トニーが最初に提示した給料のアップを飲む他、全面的にトニーの希望を認めるので是非運転手をやってほしいと言われると、本音では仕事がほしいトニーは“就職”を承諾することに。

ドクターはピアノを弾くことについては天才だが、この導入部にみる私生活においては、かなりの変人らしい。つまり、トニーがかなりの変人なら、ドクターもかなりの変人ということだ。したがって、マハーシャラ・アリとヴィゴ・モーテンセンという2人の名優を起用して、黒人と白人のおじさん2人の奇妙なロードムービーを作るについては、どこまでシリアスに描くのか、それとも、どこまでコメディタッチに描くのかの“さじ加減”が難しい。ピーター・ファレリー監督はコメディ映画で知られているが、さあ、そのさじ加減は如何に？

■これが南部の黒人差別！その実態をしっかりと！■

日本の“部落差別”を描いた“古典”は島崎藤村の『破戒』、新しく(?)は、住井すゑの小説『橋のない川』(61~93年)だ。しかして、米国の“黒人差別”を描いた古典は『アンクルトムの小屋』だ。私は小学生の時にそれを読み、涙したことを今でもよく覚えている。他方、韓国に南北分断(の悲劇)を描いた映画や、スパイもの映画が多いのと同じように、米国には黒人差別(の悲劇)を描いた映画が多い。その代表の1つが、『アミスタッド』(99年)、『シネマ1』(43頁)。そこでは、黒人差別の歴史的な重みに驚かされた。ところが、本作は、運転席で運転する白人のトニーと、後部座席でふんぞり返っている黒人のドクターが移動中に織りなす“掛け合い”と、南部の公演各地で起るさまざまなトラブルを、軽妙かつユーモラスに描いているので、それに注目！

トニーが「グリーンブック」を持って、黒人差別が根強く残るアメリカ南部をドクターの運転手として数ヶ月にわたって旅行したのは、1962年のこと。ケネディ大統領の登場が1961年1月、公民権法の成立は1964年だから、本作の時代の黒人差別は昔ながらのものだった。本作を観ていると、車の中でのドクターとトニーの上下関係はハッキリしており、黒人のご主人様と白人の運転手兼召使いだが、演奏会が終われば話しは別。そこでは、黒人のドクターとイタリア系移民とはいえ白人のトニーとの“格差”は歴然としているから、そのために起きるさまざまな事象に注目！もちろん、演奏会場ではドクターは天才ピアニストとして主賓の座を占めていたが、控え室は物置だし、トイレが黒人専

用なら、食事も黒人専用に限定されていた。警察の対応にトニーがカッとなると、トニーのみならずドクターも即逮捕されてしまったから酷いもの。もっとも、不当に勾留されているドクターが“弁護人を選任する権利”を主張し、“あるところ”に電話すると、何とジョン・F・ケネディ大統領の弟のロバート・ケネディ司法長官から「直ちにドクターを釈放しろ」と電話がかかってきたから、警察署長はもちろん、トニーもドクターがそんな大物だったことにビックリ！

このように、本作中盤では、2人間の論争やいざこざはもちろん、各地で多種多様なトラブルにぶつかり、警察に逮捕される事態まで生まれるが、2人はそれを如何に乗越えていくの？また、その中で2人はいかに心を通わせていくの？なるほど、これが南部の黒人差別！その実態をしっかりと確認したい。

■□■なぜ敢えて南部に？そこで生まれた心の交流とは？■□■

ドクターが天才ピアニストとして君臨していたアメリカの北部では黒人差別は少ないのかもしれないが、黒人差別の根強い南部の各地を旅すれば、否が応にもイヤな目にあわされることがわかっているのに、ドクターはなぜあえてそんな南部の各地を演奏旅行することにしたの？そこにはドクターの確固たる哲学があることは明らかだが、南部へのはじめての旅をドクターと共にしている白人のトニーにそれがわからなかったのは当然。そして、私たち観客も各地で起きるトラブルの現象面は見えても、それに耐えながら毎日ピアノを弾き、旅を続けているドクターの“ある哲学”を理解することは容易ではない。

他方、用心棒稼業をしていたトニーに音楽の素養があったとは思えないが、それでも演奏会でドクターが弾くピアノを聴いて、すぐに「こいつはすごい！」と感じたようだから、トニーの音楽センスもなかなかのもの。また、愛妻のドロレス・バレンガ（リンダ・カーデリーニ）から、旅行中は手紙を書いて送ってくれと言われていたため、トニーなりにその努力を続けていたが、綴りの間違いを含めその下手さを見かねたドクターがラブレットの文章を読んでやると、トニーはその出来映えにビックリ。これなら、妻のドロレスもうっとりするはずだ。逆にドクターの方も、当初はトニーの“がきつさ”にうんざりしていたが、白人のバーに一人で入ったことで袋だたきにあったドクターをトニーの機転で助けたことから、ドクターはトニーの優しさや心の広さに改めて納得。そんなこんなの“やじきた道中”の中、次第に2人の信頼関係が深まり、真の心の交流が生まれていくことに。

しかして、最後の演奏会の食事を巡って最大のトラブルになったが、この“最強の2人”なら、そこで妥協してもケンカしてもどちらでもオーケー！本作ラストでは、そんなレベルにまで高まった2人のおじさんの心の交流をしっかりと味わうとともに、そんな2人の姿から、本作がなぜアカデミー賞作品賞に選ばれたのかについてもじっくり考えたい。

2019（平成31）年3月11日記